

平成21年度四手井綱英記念賞 選考理由

授賞対象論文

野寄玲児. 2007. ナラ林の自然史と二次的自然の保護. 関西自然保護機構会誌, 29 (2) : 127-142.

選考理由

生物多様性の保全は、地球レベルで考えるべききわめて重要な現代的課題であるが、なかでも、人のかかわりによって維持されている里地里山生態系は、生物多様性がきわめて高く、保護・保全が必要とされている。しかしその生態学的理解や自然保護の価値に対する科学的評価は十分ではない。こうした問題点をふまえて、2007年にKONC主催のシンポジウム「雑木林の自然史—ナラ林の生態系を考える」が開催された。本論文は、その問題提起に応えるべく、里山生態系の中核をなすナラ林の生態系を自然史および植生学から解説し、保護・保全のための理論的な礎を探ることを目的として書かれたものである。

本論文は、二次的自然を保護することの科学的論拠として、これまでの論文をレビューし、「国土保全」、「景観保全」、「文化財的価値」、「教育的価値」などをあげたのち、それらの評価項目について、二次植生と自然植生を比較・検討しており、植生比較を行ったうえで、生物多様性の理論的評価を行った平川・樋口(1997)が提示する「歴史性と固有性」から二次植生保護の論理を位置づけるのは困難であるとしている。

日本のススキ草原の固有性については、東アジアの半自然草原の植生比較から、その妥当性を検証し、イネ科のススキと広葉草本類が共存する秋の七草の風景は、日本独特の気候風土に根ざした自然の姿を現すものであると導きだし、「固有性と特殊性」を評価することに成功している。さらに、日本と中国のナラ類の自然史(系統性)から、生物多様性の評価軸のひとつである「歴史性・安定性」を検証している。多くの文献を整理し、ナラ類の本拠地は大陸にあるとしながらも、日本と大陸のナラ類相はほぼ同じであるという興味深い論拠を導き出している。

一方、ナラ林が二次の植生としてだけでなく、日本における下部温帯生ナラ類の自然立地が存在していたのではないかという可能性を植生史から示すとともに、日本のナラ型二次林は、ブナ林やカシ林などの気候的極相林が伐採されたことによって、大陸系のナラ林フロラが顕在化したものと結論づけている。氷期と間氷期という地史的時間スケールでのナラ林のフロラの多様性についても言及し、なぜ二次の植生の保護・保全が必要であるかという命題に対して、植生学、自然史および植生史の視点にもとづいて、科学的論拠を明確に示しており、二次的自然の保護を学術的に解説した論文として評価に値する。以上のことから、本誌29巻2号に掲載された野寄玲児氏の論文に対し、2009年度四手井綱英記念賞を授与することとした。

(関西自然保護機構編集委員会 記)